說藁大全

春之部上

芭蕉發句

誹諧寶丸全

叙

源氏物語は紫式部の創作にかゝるものなれども只小説として面白きを以て世の人々に今日八千年の後に紀貫之を生ずるとも必ずや源氏の深の奥を窺ひ知らんとなる

中よりさへのされてとかの武士跡譜と名づけて
世よりこのかた近代より能法師乃稽古
乃ことにしたがひ筆にて分書初し法をいのち
の連歌とりもの型をもうしをそ今のくさ
ぐさ乃生花乃こと乃ゆゑなんなのあるそのの
世よ山海乃宗匠等法乃法元い世のかぎ武

蕉乃宗匠なるそ芭蕉とのへるハ
みちの貞徳の流をくみ法下手吟に
俗へうけ和のうやのそひなすす和俗を紀
かへてわい中庭世乃祖先やうに始のか
ちをもつ家よいけをいのこと乃蕉
花月雪乃時をつけ打ゆ世をていを世

ぬる云葉を盛ハ百年乃物語を
ふり出く歟乃面のそろてまらの物語と
出てこそ書き境紙ハ伊勢乃使紙
まらやよひのくつるを迎江の人を
かてまるハ財島を受て天乃ひのめの
書けるきとくを引て唐つきて歯

序三

書きかるこをを秋乃よりのよを京中乃
身の秋をそ〻に世のこ〻紙乃やのきに
まをひあるとしをの身よハ分をつる
人乃ねをあ紙ハ世ひやたる歟紙四の歯
かよ辞源を書るに物るを云異ハをの
ぬ人ハををたやうかるまへをるをものな

きゝ行くゝ山をとゝせぬ山路をゆ
んとてあゝぬるゝにまひ拙きをとゝ屋
ぢてい海ゝに道法ゝ由の長くゝこのゝ
ぬ紙今このゝをゝ山やゝ乃八重茨のゝ
乃きをかゝゝみ三世のゝゝえのよゝ河ゝを
えゝゝて家ゝ乃ゝよのゝのき筆紙かきあ所

めゝきい蓮深き草ゝとなりて茂ゝ
よ紙河のいろゝくもゝと大きまゝゝ
なんいゝとゝ紙もて見ゝ道のいへるとき
くゝの海よゝくゝるゝ祝乃歌の河を
ゝゝのるゝかひ紙ゝとゝ紙うゝかゝの字ゝて
ゝきまゝて文章のゝゝ乃ゝかゝ稿をゝの

水乃行ふ海のごとくにて[illegible]かいた
[illegible]ふ明和五辛うつきのくにめつ
[illegible]

牡鹿半島の海岸の法華経

導

説叢大全序

夫人感物而動者性之欲也含齒戴髮所不能無咨嗟咏嘆比興相移不淫不傷芭蕉君桃青其人也清心以見常風雅以為生一

笠一製曾無長物朝遊上
苑夕到荒邨朗然胸次思
無邪乃不識錦囊之重者
也所謂不得天下之至美
與至樂而樂者非耶白駒
既過而不息積有弓曰芭

蕉集近來其注疏出之三
部曰師走袋曰評林曰句
解斯不知翁者所為而唐
突西施刻畫無鹽惜哉金
篇玉章變作瓦礫一旨引
衆旨莫甚焉古云解之愈

增懵懂者耳於是葛飾素
堂第三葉絢堂君素丸俳
林翹楚詞海長鯨為之忼
慨夢寐於桃君十年于茲
涉獵百家于神于儒捃摭
掌故始功一簣九尋已成
殺青五卷名曰說叢大全
嗚呼可謂淘之汰之勤矣
擲之則錚然有金石之聲
既讀而從來之三解瓦解
氷消秦鏡當臺姸醜無所
逃胡漢自分點竄有日隱

括之極矣是實后世之典
型天今降穎素丸君回蕉
門既倒之瀾獨得桃君感
發之眞也六義即粲然鈆
槧之功不在禹之下不亦
愉快乎予先人桃翠昔日
遊于翁門從事於此有年
不忍恝然棄棠蔭之遺愛
故丸君被屬以序謝不敏
不可予以先子之號亦嘗
丸君之所命也於是乎古
毛州陳人那須桃翠序於

東都感應樓

蘇明和辛卯夏五月

凡例

一 袁云と記すは、師道袋の説を挙るなり。

一 林云と記すは、評林の説を挙るなり。

一 解云と記すは、句解の説を挙るなり。

一 説とハ予が管見を記し、其外古人の實記或ハ實録、古集等によりて、敬立せる句評を挙て證とし、又ハ翁の説によりて正すなり。又書名所をもいろ〻多出所なり。しかるを、諸名家の説くをあつめ、説叢みして、大に全しとハ先賢なり。

一證歌・詩文・故事・等のいのち まれる・又字句も遠つるもの・正す・

一或書・或抄・少し記すハ・古人の著述もいろ・又當時近来の作も有・其名目かけるハ・聞たのこと・物し・又考へて名もいハ・德を失ひ人のきらる書あり・其益のるもハ・消しの・のいさ・のもの・記す・

一二新のうち・に・説て足らざるハ・出所の足らざるを補ふ・但秘夏・口傳等ハ畧す・

一句によりて・其ちがひ・其ちがひ・注解し・古るものを・出すあり・業益なるハ・略し・用あるハ記し・誤のあるハ訂足らざるハ・增す・

一四季の句乃ち・雜・こと・增補し記す・右三部の他よりの

句の・古人の評・説のるものを・ぬき出し・よせて・載す・又・予ら・管見・おもふ・こと・のあるハ・古るものを・引へて・全く・のの・ちに・補ひ・增す也・

一假名つかひ・古今の二ツを・て・古へハ正しく・今のハ定まらず・家々の私・なりて・好うに・なる・書よ・引る・ものも・既・世小・行る・小・行をたがへ・ものまに・なりて・改めて・翁の句・と・予ら・今書加へるものハ・悪く・古書・あらりて・こ・記す・

以上 十條

凡例終

蕉翁發句說叢大全巻第一

總論

古人の曰、一書を得て證とするに足れりと。先達、明師、博才、頗徳の人乃書あらむハ一書あるもなりとも、其餘ハ近来の輩如何。我、爰に芭蕉翁の發句、或ハ注し、或ハ評し、ひろ解して、其ゝ三部あり。いくあれ、師走袋、評林、句解是也。ほらく勇るに、なるは誤り、或ハ邪ふ、あるは解を摸羅合糊なるなり。又蛇足、蛇添なるあり。さ中にて邪妄なるハ、師走袋よりこれ、評林、句林通例のすゝめして、其文意わきまへ、句解、れはもれ、を所を得るとあゆまるも、證辛みまう

世間にあらはれも粗見えし。解みのきこうなるさまも示のり出うまえ。
今の人をば。あなの人。その浜辺を指へ文むてて。翁に對していふ
やぜん。今志ばらく擡戈黄帶をかりして。三部の凡実を正し。
又八正解たるハ貴し。分明なるさまハ明らうてもとのごとくもいめし
へ乃事。今よりおりて知かるべ。此のり。もてきいなの明鑑を俟。
師走袋の序に云。今代の人翁の篠流を汲といへ。出うを翁の句
意ハ寒夜に帝蚕のごとく。枯木に掛紙を張きるる姿なハを計
を知人稀也。いて翁の句意を知らもして翁の門にたる人のつ
むと。管見蠡測を顧して。翁の句中に世人の通暁しうる此
ものを取て。是に注をなすと云。然れども翁の句意を知らる注

といはらく云べ。翁を貴て。おのれ邪説を弘めむとするも
の也。先。芭蕉ハ蓬莱の初便乃句注に。伊勢海老。汝ハ伊勢
乃海老なれ。知りなんらは。いうみえ。海老もいふ答へんや。
を外。麻に掉のごとく。妄曲なる。百に一を注しのごとくふハ皆古
人の誕を求めて。世云いて。後すく。翁の句。通暁し。弱きの多
く。後人を迷ふ事甚し。古朱子。和歌の俗注ハ。かなり事
多うり。西行の嘆ハ沢の嘆を。死木也。卒都婆の事。云べ云
ひ。又軟政の表ありりを。天晴(アッパレ)と自慢のごとに注しうる。或ハ出わ。
うるの乃はしもらさを。出あしうるふら。三界六道とも。ほしを求をへ。
一切衆生ゆ云。ゆとゆへまとゆ。いうみ。観世音ハ泳ちわ。そてかるる

を附會して、又は平の忠度乃別書ての文字を行ふまで、と解をつけ、先者い反逆人の流れくかりそめ、ふるきを、よいつゝ、古戦ものがたりの中ちらすハ世みも悍るべき事ゝ、爰ふも、木曾の雪解乃句を、義仲の勇烈ハ比しるハ基、正統なるべし。他の人物思へべし。

評林ハ、多く世の知るる一通りを解て、正ハ似るもの、粗見解の遠ひなり。鏡のうちの梅のごとき、事理無解の説と云べきう説中多く、古辛をひ出すとい、先又いふ、やはらん。翁句を繼ぐ、ちふなんて、古歌を引て、業とするもあり。又古歌を始まへ一ハ、たるもあり。風と吟ぜ句、自然と古辛ハかるんるを以て、一向

よ古歌古事ハ書ぶして、俳諧の句なる有、句無よかるべ、古歌をとりて業ぶんも亦、頗りかるべし。翁乃乃、何ぞ、ものゝ辭令ならもや、そもあるの句よ、やはり古辛を含せ評をん、ハ、雪白翁の意、彼ハ、おるべし。

評林と云ハ、史記評林も、漢書評林と、諸史百家の評をあまねく集めて林のごとく多しむるゝ、何ぞや、一色の評をとりて、林といふんも亦題意のたぐひとなりし。句解ハ、三都のうちあて、尤正しく、奥旨ところを得るとは、粗、凡ばきなりて、備るべる古事、古奇等、引用新乃乃、先を亦、翁乃心胸ハあれば、増て證辛のの、翁ハ、論ぶ、ものゝ、又、其句の餘情を解もしたる、先、古辛用ハ、ものゝ有べけ、ものゝ、引用法、齟齬をるを乃ハ、又後の人、述ものゝ。

又句のたけのやまり或ハ調よゝ系れたゝのひ物と挙こる左おきゝ
みもあゝさ俗屋乃ハゝも翁の句ハ好き歩ハ餘多みして
元をゝ小夫をゝきと定めゝこし世ゝ乃和平勅撰みも多し
て入ゝきゝこゝるをのまゝ也そわゝ乃ゝく是ゝよりいゝ小読も
字えさて茅系の辛をも歩して入ゝきゝこゝるもまなりて古き
かゝ乃詞の面白きもゝ多ハ乃ハ事ハ出ひて是ゝ出れと定む
屋こゝ俗ゝ堺て今の人ゝ乃て七十余年先のゝ一已をして正
偽ハゝゝ出ゝ孤きゝ句意の深長ゝん通融しゝ侍ゝ乃ゝ
し純事みやゝと思ひ侍ゝ乃ゝ
熱白翁の句紙注し解し注せんに七十餘年以前なゝ

多くハ今の人乃推量の沙汰にて證とおしかゝし事推量
に好悪ありいゝかゝ邪推なり暗推ありゆゑ小家ゝ恐法
みおゝこゝふかりてゝ乃ゝ事ありけゝ文を何為にと云に
面くゝ我好む節によせて面くのゝ句紙を造り立胸中に
垂て推量をゝゆゑ我あゝ諫の芭蕉一人をたてゝ云ん
貴乃風の寛なる和なる活なる優なる温なる穏なる文意
ハゝ性乃天然にゝ乃ゝ愛欲なる無我なる考乃ハ小
うたゝのゝ人べきや今ハ世人ゝ勝れたゝ紙を面して所
しゝ小ようゝ句評ハ十人ゝ十品にゝ乃て不和を示元よ
ゝ出ゝ乃ゝ我ゝ生一に歩くゝ書きをや予出紙歩くゝ書

三十餘年にていまゝ歟休もゝ、こゝろの俳者をまゝく慢心
あらば、只唯、真の翁を腰脇みゝ納めゝば、旅うそしてゝ、俳う疑
うん、此版ハ翁の靈前に一華一香をたゝげて、一字一滴の論
をうし、万人人うを推もよ。
爰に、又二三子のゝ人ゝハ翁を正風俳中興乃祖師也、句を語と
むハ意外に、唯ゝたゝして、世爲、温和なるたゝいくんと
もいふしへを、万葉紙はゝ、勅撰の代々の和歌、帝王后皇を
はゝ、あなを、人麻呂、赤人のゝ、ゝ、聖仙の詠、ゝ、心敬、宗祇、
契沖はりとより、季吟、山井翁、ゝの代々乃地下の学者た
ちいつれを注して、後人のゝあとをなすをいて、悼多しゝやゝん、

ゝのまゝ、そしれゝるゝ、世ゝ乃鑑ゝを目ゝ、ゝ、
れゝもゝの、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
俳諧なるゝや、二三子もまゝく、古くことゝけゝるゝやゝん、
近来、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

軍いうあるむ世よゝ詩や禅や誹や禅やとうみてと
我耳にすてゆゝ思ひ遠つるめや。そこと毎の如しと
つゝるの也。
渠を憎むとて記すみあるべし。是我著めむとて説のいうべし。
ゆきい天地より能く。あるべいハ弛ハ正理のおこの
らしむ所古今普通也。唐土よ刺孟疑孟のたいう。倭に
能好拾遺。能ゝ載ゝるゝ必しるべし説叢を名人。彙を
くみ行ゝ名ゝ。我りとよう。井蛙狭識なか誤り多から
む。好の君子。まゝ出て訂考せん事を希の。

以上八條總論終

葛飾　素丸著述
同　南臺撿校

春部上

年くや猪ゆきせさるの面

俗 云是ハ世人のいとゝもし業れ果しゝ日を年ハ積き
るも命ゝきるゝを名く唯猪ハ猪の面を着せ猪と名
ゝ毛たるゝ也 **解** 云按ずるに六窓一猿猴の心ゝ通ハ能只人乃
心の彼ゝ移り是ゝ定り是ゝ生死無常の理を悟ハ猪ゝ面着

きこゆ極楽の光の中にとゝまる翁の新恋しく七猿の翁を慕ひ奉り哭く成人云々

翁生辰後光明院の御宇正保元年甲申依て此吟ありと此説

理屈あしてゝ為難し　許六の風俗文選を引説の如く無益の長論を畧

説　袋　すべてなりはひ似るものし　解　新恋のこゝかりて

業深凡此句に有ゆる古夏詩を摘くかゞり廣大無辺

ふいんの限を尽くして皆勝道の功あるに踏

まうふのをさらにむりうき者よあらず因前今日のうた

無常よりと評もむいのうくべうぶ○去来抄曰此句いつれの

所か巣居と開侍らんやと翁の曰そこくいふて来るべや

ハアッとやて退きぬ云々○古今抄云此句いとりぶに迎年

乃言ハ能ハずうく捉らる巣旦の泥をけまだ雑の解

とやいふもむと云云○百菴が万々葉に云年々歳々人不同花

相似たるを可乎と云云元来ハ似たるを似るとあるべき歟

元の新想の新ふ海しらり○近来徳が翁の句を論して

十二月の論なり去尾の句と交一句ハ巣居句ハ巣居句

なりとして徳が方ハ巣居を句とするよりも巣居ハ

て句論のすまかハ巣居ハ海ぶきめる句々多く有るの巣

巣吟くやくはりし句巣居と云交へらかりし新恋

ず近来偽筆多く影しし伝用しがし巣旦多くて是必

定也○徒年甲刃の稲中菴黒露に問ふ曰此句如何此所

あるべし。むかし深川の素堂ちかき年の暮に文通せられし
句。文章の事に二句の新語有。翁も世稚を猶不知しか
ばかりまことに。さも異なる人也。歳旦也。素隱士のがたりせる
也。二句の語を手に書てあるべし。此猫は事なれば変あるべ
きなれば変に成し。右二句の語乃ちよりよりあるべ
き也。師侍を変ぜしなり。

旅やつるすがたの花乃春

袋 云見雨居の後はいまも幸に遠ちかめとるの春を何なに思
ふ。師を慕やつるる姿の花ちるとて乃俗人曰世人のうるく

しき出立のきれいなる引なるる鞋を旅やつると疑ふる言しるも
なり **解** 云大路長閑なる松立ワるせ新年海光深民或は五五中遊
ぶ人の衣冠優美の姿ゆ思ふ合せるふる或ハ五五の杖藜
松風吹うるに夢うるるふ新仲律白張 後成ハ世俗を稱する
翁は八旬有餘の老翁白髮なる錦の帽子紫檀の杖
うるに虎皮を松下の叢ゆ敷て嘯き遠見して和琴をかきな
らす雪に松風おのづから伝かるる夕べを乃ちるつ花ちるとて世
ふるるるるるるるるるを持せり **林** 此句を出さず

(説) **袋** の注文多摸羅含糊。一句に用ふるるるるるるる。者を何と
もいふべきなれば。いうるる意ゆや。世の人い歩を何とおりしあ

陵ぎりのしるしとも

解 八幡のたち、こばらく擾ありしとつたへも。後城山の平れ山人、位高きを誇翁し給へし也。此句は元日の新ぼらけの景色に紅風情をもとめしも。況て一望千里に遠ひのる気、文形なきものにうちを物とい。此句おかしうず。詩平かにして○白氏文集に唐の延陵妾が容を称美せし詩にして、端正容貌若二陽春一とあるより出句也

○句意は、元旦の曙の景色、人物の威儀礼正き風情、又延陵妾が容に似しり。一結して俳諧一道の活法也。此楽天が詩にして、和歌の法爺も如れ、翁の句、そのごとかぐらず。ひとしき也。而より始まりて、初春振を祝ひて、移るまで。

遠き祝ひして、おのが光を餞ふるは、翁の心青みのうず。山家集白氏文集は、翁まはたはあるを、たしかに勝えのこし。全の春をも、ひとつ、家やかしこ、人ゆ、今を、学文をうる人ぞ。

雑人の蔭きて在て乗乃春

解 云孫晨字は元公 業益高下略

説 孫晨が事一向にうず。古今貴賤の人を引んに限あるべうず。是と蔭の遠ひあいうぞや。兼好は徒歳うを云句の、引るゆは似合ひもすぐ。かくのごとくあてい、翁乃

裏林 此句を出さず

胸中知らんと強しいふのうたのうぢて既よ。○涼袋ぶ。片音二夜
問答あるを云。世の人初番のたゆたゆとていつまでもいつまでも紙衣よ
ぶるうちの中に薦かむうち着てある人もあれば旅人の薦を
ていはもとても字面又豊なる御代の者へに旅人の薦を着て
居るしいつまも新敷みうふ陽ちんとも字面此海の新句
意の事みはあるに在(イヤヌ)の紙下賤れ者に対してはうふ紙す
あらぬ(とうすりト中略)して近比芭蕉句解といふ冊あるをもし孫晨ら
事をいてい大み者ら次り孫晨ら事を作らと旅人うとい
歪屋きやや又掛蕉の眼もたんひ句作をかくはのうとて何
ら罵ふうしとうを云○右の問答の者へいはすの紙下賤れ者の

者らあとうよを。去くしを沈しぬ。此俳者を示。此句乃姿よ
へ初ぶぶるとを元えうり。句評しそうもらを捜して一向ぶる
らぶで。蒜蒲ぶるとうぶぶやや。旅人先食やの。思ひうふ淺そを。
旅人先食にいはすの紙ちを入まいい何故ぶやと保くさぶを
元ぬうう。偏辟乃論者と。世に知ぶる也。在の紙みをつきを
ぶ早く知りぬ者きを○馬光家書の内。素堂夜話問云
ふ云。我素隠士ふ。此句を問。素堂答て曰。是いうれ。片品山
の餓人也。十二月に古子對面あり。歳旦ふ極たのうんぶ。稿の
りの先食乃をつけて。何とうく。思ひ出して。吟せ中。翁
ふ乃ふの拙詩ふり此と。如此澄説い多みれ馬ふ。秘夏

なりとぞ。初車を迷ひの涙の袖にかけて。はまみて
形すせ。信じて敬ふべし。黒義回解。回紙をもて依るものをいはん
その胡ふく叶ひ玄西。下跡に級合ぶと云人ふ。春秋傳を
よませなば。一足も動くるいふ。一字れ褒貶とつくと
だも。ひづのざりうも。○日本紀曰。推古天皇二十一年。冬十二月
唐午朔。皇太子旋行於片岡。時飢者臥道垂。兵○元亨
釋書曰。推古二十有一歳。十二月朔。太子過片岡。見飢人。兵
その名称をしまむと四支のまりて
酒臭しもあるを元日は皇まて休して
曙見をつしてる

二日ふるもぬうりいせぶ。ふ春乃春

林 云雲ものの氣情をうるへ元日は新麻して一ものせの曙をうん
をつしてる頃者乃境東を二日ものもぬうりいせをい二日ふも朔
麻して謀の暉を四見書うる世北泥濁の更を別て庶原ふ腸を
探ひ求るに加へぬうりいせをを白氏文集勸學計一年有
陽春と 吉益分れを下略す 袋解 此句を出さん

説 林の世源。文意例の模羅舎糊ふして。ひうりかねより。爺を
をつるて。青より友の為うて酒興し。翁をふろ辞て法ふ
し。加。鈴よ鈴麻して。笛まで起ふ。鮮いなるも。見い者尾

閑樂のさ間あて世てかりくぬ而も。さて日光てはくてし
きけ一とせのはつあけ曙をゑんちゃーけるるよ。らしく二日
とてもぬるりかせ。曙をゑんちゃ。二日とても。よしむの春ゑ
ててあれと。凝滞をちゃ。心の程を賞をる。しぬうり
いせ。かい沙汰かをぬと云ゑ。ゑを俳諧の活所とをや。
抹茶のあきい。ちゃし。新茶しをゑみ。さい今時のす
をかゑる賣僧（ハイス）陽者のさはみて。翁のうむるゑ多ゑ。あ
たるぬる也。光胡をを。よく味へはの条評ん。又屈平ゑむけ
る事ゑる。集い忠誠の大臣ん。桑門の類ひよあるを。生意気。
雲泥懸隔のたゑひん。ひまを百菴ゑんさん。翁ゑ課罪といい

たるをぞうし。又白氏の詩をり。ぬるりいをゑ。ゑの評ゑ似ても
あるを。古語に一歳計ハ在元旦に云語を。白氏ををり用んし
ん。何ゑうして。ぬるりいをぬと云ゑ。ゑよ。ゑきや。きをぬるうし
浮ん。千年。

ゑるいりゑ。ゑや伊勢乃初便

袋 ゑ伊勢の初便いきたるゑ。元日ゑきを。ゑる。ゑ。歌。し章
遠菜ゑ有伊勢海老伊せの事ハ知へ。集小ゑりるゑ。ゑるゑ
林 ゑ遠菜の事ハ。ゑいせゑ。ゑる人ゑ。ゑて。浪蛙。き花林ゑ
洲ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑて。ゑと。ゑく。梅ゑ。橋を。句中。ゑて。遠菜。ゑ。ゑ。

たるものなり 鮮云慈鎮和尚の言より日暮し分る此旅よりはるか世
ふり人常の人は元日と雪の蓬莱と形容をとるはるか
人間の風流なりとなり 下略す

(説) 袋の注一向邪妄信用をとるべし。伊勢海老いと多し。

林 小児のものつくりし 鮮 当世まるは、支考が為蕉翁抄、去来抄
に法しを雪の頭巾すべきなり。蕉翁を解といふ
べかりしなり。○十論為辨抄云前文は、方便の句作者は趣意を
はなれ新奇のみを名人の句法ありて蓬莱の景
みは人の及ぶ所にあらず乃人の弱点は俳諧の為
かれる沙法なし。偽は作者の名を汚すべくなりしかの

呼ぶものなりとなり。僧の又強して法は人我の知ること
能ずは菜旦に蓬莱のふりを人の及ぶべきはいふ陳云
新する所似よりし此句は元禄年間伊勢地方
を新しを元日にと雪へき蓬莱のものなりふ素題
の為をもとしん例の意を破きるを破ることを句法
也風雅に為能大事をもしねと意を破ることあるいはすこと
よ一発をくて感しのつりもふと俳諧は十色十色あらて唯
佛與佛の究ふもの市に伯樂乃日利ありとなるをもと
ふ法を略して解を知て為蕉翁抄云とも。又古人のものを
ものつくりとなりて・強勝ものんを下情・方法なりて知

ちぞ我を人とは事を。

(説)慈鎮の證弁書に云たのしんの[illegible]は奥ノ[illegible]ハ[illegible]誤也。

○拾玉和歌集(慈鎮の家集)第四。賀。長法楽。詠百首和歌。夏十五首のうち。はつ[illegible]ハいせにゝ[illegible]人とゝ[illegible]。此平。紅も[illegible]。[illegible]何ともはつ[illegible]。法楽乃年月もゝ[illegible]ねど。[illegible]。又類句あハ[illegible]。[illegible]。[illegible]。○百菴ゞ万々葉に[illegible]。拾玉集ハ初句はゝ[illegible]。[illegible]。[illegible]。

橘のうちみて、ぜひ、味ひ、その試かゝぶとい、てゝ。○百菴万ゝ象
み、移ゝの説を出ゝ、ゝ、ぬ、ゝ、ひ句に柑子入用の句、ぜ。橘ハ倭俗
の習ひ、資稜み歪抱し、橘ゝ、ぬ、ハ、寒柑橙を代りす。○愚
按ぜ、ゝ、ぬ、ぬ花かぜ、ゝ、ぬ、ゝ、や柑子の花みはあゝ、ゝ、ゝ、や、伊
せの人より香合ゝ、ゝ、ぬ、ゝ、ぬ入て送ゝ、ゝ、ぬ花かゝ、ぜ、ゝ、ぬ泳ぜ
ゝ、ぬ、ぬ、ぬ

可謂遺恨乎こは海もぺちり いづれ世をかして侘 此句の
解をいろ〻ゆきかと思れ侍る 稲中養黒蟲をかいつゝき
我八幡の末裔へ孫也 黒蟲あいみ〻度 身の侍りしか 遠近
して云ひぐるを 去れて見能みとゝしかど すこしはのとだの
里 我拙 澄里しぶ 和尚 愚曳名 ふ屋きてこゝにゆくぞ 必
沙汰すると いひし 老人とはかさめしを 今度きても 彫し
給し 翁の句とても 初後きうば 伊勢の後りかと 地而の
後りハ行うちんとう ○去来抄ふ云 原川ちの文 此句は
はくの沙汰り 沙いうぞ 沙汰やとも 去来日 都古ハの後り
るもあるす 伊せと侍るハ 元日の式乃今様なるかか 神代

を思ひ出るの 後世をもと 乃祖神のうや 胸中をさいかし
ふとうて 彩り侍るとや 翁曰 沙汰 有るの 今日神祇乃
かゝる 義ゆうを 古ひ出て 是 猶和尚の 沙ふさより 初の一字
を吟し出し侍るを とすり 文 落去に 伊せ 人 如 つ
後りかきと 是 和尚の ふ侍る 便の一字を出 有て 御音
の 沙ふ たゝ 沙 清浄のうるはしく 神徳乃かゝく
義ゆうを 蓮業 ふ 対して 侍ひ 沙 不 重也 云
此説 秘蔵しとへぞ 安 沙 ちくふて 初 の 選ひ
きぺ 侍し出し 翁の自注 ふ 自 を 乃句解 ちぐ 巣 をりて 正證

おとゝのの一ときもうし梅乃も

解 云おとゝゝゝ俗言ゝゝゝ

[illegible]と云ふなり。何ぞゆゑしたがひや。梅ばちりて少時眞女子
はきる例。古今詩歌なり。拳ゐて[illegible]なり。

神垣やおもふもかけし涅槃像

林 云伊勢八日は本の神社なりてあつけなきれ一切なり無[illegible]
貴流より入て[illegible]涅盤の法会を梅と[illegible]神垣のごとく
幸と示仏法の希も現世未来を兼し句意なへ[illegible]
神恩も[illegible]仏恩の方便もいつまでも希と何と云[illegible]
ようなれ[illegible]ものなり[illegible]未来[illegible]
[illegible]なり法[illegible]ものなり[illegible]

[illegible]深意を下に寄也 解 云金葉神垣のゆゑり
とおもふたすれ[illegible]の[illegible]
て無為迅速の句情なり 袋 此句出[illegible]

説 林 一通りは[illegible]なれ[illegible]
[illegible]は一念と入りかの妄注也。和歌連歌あい三世のうをは
古き連俳集要と云[illegible]三世不可得の證句なり。芭蕉
より[illegible]理屈は捨てらるべきなり。夕顔や
杜いろくの新しの句を。色現未乃三世をこめらるとも
云べきなり。理屈八風雅の海ふあるべず。又涅盤い誤也。
何として撿校もなくして梓に新しく兼者。又何と云

又家より多かさしてこと、じ文限一向ゆるぐ西りの
寺れ何ぞの何とゝふ詞の事ゆや。出ぱ法てあるべき
を。又和りの家にまさるべきゆるの事もゆるぐ。なくあ
まりても。たゝんい翁の如不背りるゆゑ。又西行の分れん
ゆゑ。ず来ゆるゆゑ。自注の引ゆるも。云ぐきゆゑ。此分
家集をぱゆゑ諸云ふゆゑ。只世俗乃云ぱ（一のゝゆゑ。元ゆを
引出ぬもいゝぐゆゑ。

解 大に前きり。引ゆを間よ髮を剃
ぱ。誠よ為に百練ゆ鍛の功。乃えて感あまゝゝ。○笈日記。
伊勢部よ。貞享の間なゝぐ。此国（抖擻ゆゝし的。何ぐ
寺院よ詣てと。詞云ゆ。伊勢少てとゝよ詞云ゝ。いぐゝし。

説 ゝぐて句を。深く法ゆ。此合しき事ぐゆを云添へ。
文章ぱりてかさゝむよ。やいゝゝゝゆゝぱるゆやいゝゝゆゝ。
ゝれい翁の心賞よあゝゝど。伊せい日の如ぱ宗廟あて猶ゆ
扨ゆを。を一国いかゝく為。神乃くゝ社中にゝふしを。涅
槃の像を見法ゝるゝと。云ひゆゝゝゆゝ。ゝ
こゝ。即俳諧也。神仏一躰のゝゝゆも。云ひ合を云ゝゝと。
論にゝゝごゝく。推量の沙法ゆして。翁。を心ゆくゆゝ
よい。却ゆ翁よ課罪と。百菴ゝ論ぐ。類ひかゝぐ。唯思ひ
もゝけぬ神社少て孫ゝゝん像を見ゝるゝてを。しくゝも奥ゝ
とゝゝれゝのゝこゝ。蛇足を添る事かゝれ

梅ちりこの宿乃ちろく汁

袋 云此句乙州ら東武行よ餞しての句也中略句意い東武ハ名物をかくして面白の事を出さり好士のゝあよ注を略ス

林 云上畧旅を志ろ人の名所くれ風景を一句よ案内ちて遠ろ見風雅の友ハ志ハ名ゝ餞きるふゝて **解** 云乙州大津より東行の餞別し梅ゝ多い青白の色立ゝして乃くハ風流さゝとゝ云ふ心も籠ル中畧 ハ句三段切口受

説 **袋** 東武の名物を隠して云いぬゝし入りかゝとやいし む又面白の事を出さゝ句やいと行ゝも行ゝ文意也 **林** 俳友の志といふ乙州い義ハ弟子ゝて友よあゝど此旅りの時義ゝ史邦へ遠ゝ餞ゝ所ゝ門出の文能し真跡集ニ出タリ **解** 大よ擬ゝり越ゝと云ふ色立乃事い全く世の好変句ゝむ義い何仏ゝ梅ゝ多ゝ尚香をかゝ人挙ゝ多ゝ也餞ゝ餞ゝき事い嬉しゝ又蕓翁よゝい書ゝ多ゝ青細の色立と長屋の中や晴き柳の及鍋ゝ青白黒の色立と云ん中事を好ゝ人を指ゝ句ゝ

○句意い梅ゝ多ゝ乙ゝ純よ咲ゝば業をよやゝに切て鍋ゝ宿ゝ淋しゝ汁を乃ゝ道

すぐらの心を慰めかぐら・一意をもとゝする・益の義つゝしみ奢
をぶ〜すべし・義なりてて張なり・示誡をもとゝし・是翁
の心骨也・能く可考也・○三段切口更とゝのれども・古字抄よりも
俗い妙し・一度見し人いろ〜解をぶ〜

三段切　月よ考案・山ずときん・初鰹・
梅・考案・ゆうこの花のとうけ・

○再撰貞享式云前略前章い素隱士う鶴倉の吟りし世句
の称もる所い図ふと語勢をいひ出して耳に口にとゝを過く
ゆるゆるい影畧互見の法ありて是を三段の切と言て
俗素い表りの餞別しるをもとゝれ優游よい趣もゆり為蕉翁

ゆり鶏子乃箱ふいとゝ汁もゆりんとゝにやゝとゝ俗風情な
ゝるゝるふい植物と食類とゝ結前生後の徴ありてとゝ
い趣ゆりのふの法やを為もと十成の俳諧能也是者を三段の
妙節と称ゝ早意い句中に切字ゆりれども是ゝ夫ゝ
差別をもて三段い例の三別なるとゝや云句海よ益なりと
いへども・初学此・口俗く〜迷ひ易を歎きて・今又此しる
ちゝゆるゝやゝるゝもとゝ

林

云簫の夏に春鶯囀の曲ゆり是い秦始皇の為蒙恬といふ
人初て作りゝ俗妙也詩ふ之林鶯何處吟簫挨嬌柳誰家曝（廿二字文誤ゝ不解）

麴塵 解 云其ハ樂器乃画讃也劉向別録曰魯有善歌虞公発
聲清哀拂動梁上塵 けんみかよつうの梁上の塵をうごかす
るふこゑかとうる俗諧の句素堂千鍛を称ス 試 此句を出ス
説 林 ちりを妄注耳ちつて鼻へ出るとゝ云屋〻又文義のつ
まる所をしらず又春鶯囀の巻晴雪に礫歩ぶ巻 簫ハ和
名抄風俗通云舜作簫 先堯反和名世宇乃布江 箏ハ和名抄風俗通云
神農造箏 俎耕反俗云象乃古止 或曰蒙恬所造秦聲也ちから簫 フエ と
箏 コト と混雑するゆゑ琴の句に簫の注齟齬せるもし又詩も
とゝ云詩経の外いゝなる事もし誰の詩集ゝも況もつぎ云法な
ゝを考しるべきもの引用ふ詩を示ス云ひやゝ

○白氏文集 二十八巻 天宮閣早春律詩天宮高閣上何頻
毎上令人耳目新前日晩登縁看雪今朝晴望為迎
春林鶯何處吟箏柱檣柳誰家曬麴塵可惜三川虚
作主風光不屬白頭人 あは全ちりて出て出て簫挨
といふのゆゑいなゝ此二句何とて卅句ふのゝ
もやゝいいて巻をたまはるゝたを柳とゝ云句あは
引巻きちやゝ又琴の塵とゝを解をゆまた麴塵ふと
のまみもやと附合せし所也麴塵ハ黄なるかゝうゝ柳の
あるまゝもとるはあるゝ黄色になるゝゝそれを鵝黄とも云
天皇の御衣をきくちんゝ白堂上の人ハ着ものを

るさて。只荒人い。抱頃してきるもし。糊のちかれるもちるを。
高家の糊ぞるのからうなく。ぶに遠ふるあや。いつまを。
評林の浜たにたがひて。竜角云みし及ちぶ 解 劉向別録
の語相違いり。然れども世書ハ。今い亡闕たれい。全書
又る人ち。只りのよ引たるを。又るのえなれば。異いあり
ぬ。然れども此虞公ぶ古事い。こふ夢れよ。ちとるも。
今を世ふ。ふ。辛妓浄るるに。かるる人てとあり。弱キ人てるの
るるごとし。虞公い。渾ひ人て。楽器のまはあれば。ば句よ
いに。ちるく。このよるあを。ちるも。楽器乃濃と。眼のつき
たるあい。当れり。去ちぶ。世楽器い。ふふるらんと。云名

をちるあを。可惜こるか。○予按ぶ。此句ハ楽器いに
しを琴ちるべと。琴の古事ふよるぶ。○列子曰瓠巴
鼓琴而鳥舞魚踊。○史記二十四巻 楽書第二曰。晋平公曰。寡
人所好者音也。願聞之。師曠不得已。援琴而鼓之。一奏
有玄鶴二八集乎廊門。再奏之延頸而鳴舒翼而舞。
云云 ○ 此句意ハ琴の画讃ふし。世琴や。神人の弾ち。
きもしをハ。清声ふ梁上の塵をもちくひ。清顔ふい。鳥奥を
を感きしめきもと。琴ハ徳を称ちし。義ちとも当ふ事ハ
入抱ちるる。琴の義とを入て。をとたびかきちちさば。もを
ちちるべも。琴ちもし。義の句にいをつまきしし。磨弦

義家弓馬よりこれを習ふといへども、やはり準らへ事と
はなれぬ文学なり。又芸能のうち、義のみにきはまるべしや。
千鍛万錬をかさねて琴をひいたり。死も忘れて琴に死せるも、
えんとの風情格あり。画讃の句躰也。去形のごとく画讃とする
慣なる證跡なるべし。何也の集みを入えて。○然るに、
往年明和戊寅秋二六庵竹阿坊、四国九州の行脚終りて、
帰りて世間に、此説の撿校をすとて、一覧してもて
こなをうちて曰、此琴實に的中せり。我四国の漂泊乃比
伊豫の國松山なる何某の家に伝へし、三幅對乃軸物あ
り。其句を中にして、右に其角左に素堂也と。寸左右の句を問ふ

に、明和癸未春、すみやかに信をしるしあらの
松山の何某に送る。外箱の表にやくこと敷書
乃ごとく

樂器三幅對　画　探雪筆

左　太鼓

青海やを敲ゆるうて春北斗　素堂

中　琴

ちるかやをるも弱るく乃巻　芭蕉

右　笙

逐鳳凰

りうのうの相乃義象や笙北斗　其角

ゐにおいて予始て歎息す。西行の人名いさゝか故障のゆゑ
略しゝかのごとにすて出さず。よ者予が方にあり。誠に
人いまゝにあらばし。嗚呼幸哉

腫物ゝ

さくる柳の志ちゝ(解云志ちゝとは出せり志ちゝ(の)ハ下知ハ訓されども
糸菜合に志ちゝとよめり上にさくれしの人名下に
志ちゝとよめり上よりさくれ志非志ちゝ中ハ哉
あれども非志ちゝ中ハ哉
ゝ為ゝ訓数仮名つゝハ
てふもまぎれやすきゝし

袋云此句ハ桁の嬌ゝ為ゝ人間の才に驚へていとゝ腫物なゝ
にゝ和ゝ三ゆゝ此ゝ為ゝ也解云許六ゝ字多法師小腫物みさゝる柳とゝ為ゝ蘇の短冊を
取ゝ諸集に出ゝ為ゝ本の、さゝるハ誤ゝ也ゝ拾ゝ為ゝみさゝる柳
ゝ為ゝ初の稾ゝ為ゝ柳此さゝるハ例乃再稾の新省ゝ為ゝ

句法玉連環体口受ゝて詩奇連俳ゝ為ゝに此ゝ糸菜ゝ為ゝ
ゝ事ゝ也抹句を出さゝ

説袋姫しゝれ立浪正直也。解衣品の事。左ゝ。去来抄
ゝを引て為ゝ云す。又句法の事ハ。後世好事の媚みて。蘇の沈
沈法ゝ為ゝこゝ。あらぬ。支考。去来。許六。何ゝ也ゝ為ゝらさん
や。ゝ為ゝれ證據也。詩法。あかぬゝに。用ゝるゝを不及事也。
又云此ゝ糸菜ゝ為ゝ連俳ゝ云ゝ。詩ゝに糸菜ゝ云事ゝ不聞。
五老井和訓唐詩解ゝ。倭人の作ゝ糸菜ゝ。唐人
の作ゝ糸菜ゝ為ゝを海ゝ。奪ゝ為ゝ。爰ゝに云ゝ倭人の
詩ゝ為ゝ。又連歌ゝ為ゝ。詩句の法ゝ。句作ゝ不用ゝ事

いろやと・諸宗匠に聞合を給はるべしと・中しきき
句楽ぶりに・詩句の法を合て・考へ・却て句縮て俗
里て・幽玄躰出るかたかるべし。○又ものいはぬ・きい解す
字陀法師の説を挙ぶ・柳のさくらを粉青と称
て・玉連環躰なり・句法を出て・つねず・是許六が意
掛へ・ざるにより紀・許六の云所・掛あはさる柳の志なひ
といふの次第・くさりよりつき・正統なる所よりとして義
し・是即玉のつるなるがごとくの句続きと・腫物よ
柳といづれ・くらべ・しくなる也・詩ふを倒粧法・和歌みも
隔句法・ふるに志ろ・ものいふをもやうなるねず・多く

用ひぬ事也・是を却て・再楽の粉青なり・推量の解
をつけ・いろくもやうなる方を・よくとせん・正風
躰なる・玄旨・掛に柳さくらをいふ・玄に滿句の法と
を・聯句上滿意の法なり・詩に鎖の法なり・ひとえ
なるなり・さわぐ・許六を・連句の浅句を挙て・衣うり浅茅
といふ・衣うり里い浅茅にとつくい・和句の法と
なり・俳諧亦・和歌の変躰の一名なり・玄に・ふるして
何よ・ものいんや・初学の口文口訣なり・に迷いむるを歎
きて・此をのこ○太来抄曰浪化集よさいる柳と出り
是ハ弓ハ誤伝なり・史邦ハ小文庫ハ柳のちいるとと

改歩す支考曰さいるを柳といひて改め移り来る也
つゝ柳といふを考曰柳の去来に脛拙よさいるを比喩也
去来曰御ゝゝて柳の歩にてさいるゝゝさいる柳こゝ
歯根よ少へ移る為童て予ゝ涙を紀て考曰吾子の説
いひ尽ゝゝ只さいる柳と少色し丈草曰泡の続きゝゝ
ゝゝ改題向い考ゝつるゝゝ去来曰流石の歯士
変を少語いさるを口惜し比喩ふしてい非をくゝいん也
にさいるゝはいて及ひ格位を示おゝ許六曰先師
の短冊よさいる柳とゝゝゝ上柳のさいるこい首切し去来
曰首切也の事い予ゝ少而よ実し今論に不及先師の

文よ柳のさいるを慢也許六曰先師の説よりあかされ
し向多し去来澄しるを強しゝ也三子皆さいる柳
の説を好賞称判し給へ以上○去来のたぐゝく脛拙
歯ふ柳のさゝゝるゝゝ少て一層向上の俳骨あゝ
ゝゝて為林斧主の風雅ゝゝ高き識有て世人
知事稀也支考許六丈草ゝ孔て去来の高識ふ及
ゝぐ今日れゝゝゝく耳に為て世俗小近き所を思ふ
亦也予按ぐゝて支考許六ゝの敏智にして去来の
意を知ゝゝ事い知ゝまぐ久ゝぐゝ一句の寛厚平和を
ゝぐゝして去来の向上乃識れ

ぞうれい・後世の和歌・俳諧を媚る・好事の人・連玉環
時ならず・句法を立ては・人の横合と成りて・害ありぬ
べし・前の思ふ所なりとも・無益なり・道を学ぶするの
心術・又思ふ事なし・又義のうちに大切の柳一本去来が
ひのつけ・ありとやさしく・柳は来ぬ事有・ちせ紙の
猶も徹しくもむ・亦知べうず・此句詩六歌仙共
きしや・年月もかけまば・どちらを好るも定め難し・
ふるは・夢さが宮初の吟・再来れ吟と・わきてるるも・
推量の沙汰あり・一已をもて・矩とす難し・いづれを
いづまさわうちがし・亦詮行みを・せよ・さる柳・柳の

さる・どちらを・句意い回しる也・後拾が柳へさそうた
らんい・意を害ぶ・ちすむ・句意・いかをも
きうるし・面そのなむうるあ・了解しを・害のる海
ぶくぞ・ひとりあ・句法のことい・ちわくを・去来抄を
外古伝ある・係の淵色と知るべし・
○ちくく此柳の・去来を思ふこと・ゆ年二十餘年・徒
し寶暦のはじめ・夏の蟬の美に・光僧卒然と来り
て曰・そこは年月・は柳を・ふること感ひ・よく知るもと
ぶらく・右の拂子を・左の揉紙のうちいしたて・掃しに
及ぶと・知るはるしらんかい・是を・はじめ・かくに偽談

ある句ぶを正しく行て、笑ひて其言のごとくするに、果然と類を得たり。是實み數年の狐化惑ひ有るやと、有無をしらず。然るに、句のれも てきく深きる所、さ侘くの理味み義を述べを出るまた、海を渡りて乃ち也。眼前的當なるしかも 怪多物語なと云ふ。世の怪談云ふなに出て、人の弟に あるは、侘さて行つる事なかいいふみせん。爰に於て 我片言をもりて、初軍を解きしもるの術あり。たやすく 解しがし。狐信の革みはるなし。説叢の発起こ うて行りて、六年に十年、今迄ご一を遂くのこ

大（比枝比叡日吉いみな仮名かきなり）ひえやしをを引もてし一歌

袋解 爰に一体の事を挙て云ふなり。本ちみ保せんべし。

説 花雀ぶ。なを我句選よ。泊船集をもりて、世句翁の吟 なるよ。或人みを。實否い詳なしぶと池ち。泊船 集りとよう。杜撰なる物と。此句も亦いはゆるき名。

あをやぎの泥ちぶ沙うるる

袋 云三月二日の句也。青柳い末の柳みハ緑とは日い紅顔 艶麗の美人沙ち小出て海道の泥中に捨ふるあれし彼

如を揚柳みはしらて常ならぬ柳乃派みさてとの作也

林解　此句を出さは

説　袋　くるかるぐ邪妄説・妄人のこゝろみ出んや・笑而断腮ッ　こゝろれ先生事こ・異端を攻る害ちうと

こゝ・初学のゝ為に迷ひを解く○本の柳こゝ乃

の柳出さいれ多くひちてきはたこゝの次千みは

ちづこゝふ・派こゝ・此派にたゝとこゝ有・俳諧

のこゝこゝ・外る事をこゝきまこゝ・翁の心骨をたゝい

こゝ・邪智を弘ちこゝ・魔道こゝ也こゝ也邪

こゝ・可恐こゝ

末霄のなさけく雪やまんなく春の草

袋　こゝ題いこゝさしこゝ見い義仲の墓を又い給淡こゝ

へこゝ一句のこゝい末霄庵の素姓遠こゝ陽蟄こゝ時

を得て勃興こゝ名を一天に弘さこゝ雪をまんなく春草

乃こゝこゝ也こゝ有い信濃の雪国こゝ妻草のこゝ邪也

林解　此句を出さて

説　こゝ注こゝ邪推妄説不可用也・例の入こゝ・移こゝ

みやこゝの病こゝ・情ナサケの字を解こゝ・素姓氣性みこゝい

体こゝ・此句の情こゝ・春情こゝ・陽氣発生

の氣をいつるも。句意ハ木曾山家の雪國なれども。春陽と氣乃ちきさけん。こゝかゝ紅をのこし。雪の中より。菊くを[illegible]ものくと。さいぬけ出るよと。こゝも。春情と詩みを。つゝふは。春陽の氣を表してゝ迫し。閑園早得春風情と此まる所可知。義仲の墓ゝ画瀟し。不決孤[illegible]。何とし此句の作をかしけるや。義仲の墳ハ江州粟津の義仲寺所都ゝ。信州ゆし粟津の句をもん[illegible]や。又画讃の句歩ゆ決句かし。木曾の遠中の吟[illegible]。頭をのる屋ゝ[illegible]ず

蕉翁發句說叢大全巻第一終